

あくねの歩み *History of Akune*

阿久根は平安時代末期には英祢(あくね)院と称され、その院司に任命されていた英祢氏によって統治されてきました。後に英祢は「莫祢」とも書かれ、15世紀中期に現在の「阿久根」に変わったとされています。島津氏の統治後、明治4年の廃藩置県で鹿児島県に属し、明治22年の市町村制実施によって阿久根村として現在の基礎が確立しました。その後、大正14年に町となり、昭和27年4月に県下6番目の市として発足しました。さらに昭和30年には、隣接の三笠町と合併して現在の形態となりました。

Akune was referred to as Akune palace in the late Heian period (794-1185) as it was ruled by the appointed leadership, the Akune clan. Akune in written form saw a few changes before settling to the current set of Kanji letters (阿久根) in the mid-15th century. After the rule of the Shimadzu clan, the Akune area became part of Kagoshima Prefecture in 1871 with the abolition of the feudal domain. The current foundation was established as Akune Village in 1889 with the implementation of the municipal system. The village later became a town in 1925 and was inaugurated as the sixth city in the prefecture in April 1952. Finally, in 1955 Akune and its neighboring town, Mikasa, were merged into one.



鳥越古墳 1号墳

古墳時代後期に作られた県内最古の高塚古墳です。発見時、墳丘はほとんど削られていましたが直径20～25mの円墳と思われ、前方後円墳の可能性もあると考えられています。埋葬施設は竪穴式の石室で長さ4.4m、幅と高さが0.75m。安山岩の石板を積んで作られ、割竹形木棺を置いたと思われる粘土質の床からはガラス玉も出土しています。付近では5～6世紀のものと思われる地下式板石積石室墓も見つかっています。現在は、はまじんちょう公園に移設して展示しています。

脇本古墳出土品

市街地より約7km北側の内湾部にある脇本古墳群は、県指定文化財の糸割洲古墳群と市指定文化財の新田が丘古墳群の二つからなっています。種類の違う墓制が隣接しており、鉄剣、鉄刀、鉄鏃などが出土して、市の古墳文化を知る貴重な遺跡となっています。



かんめ
神舞

波留地区の南方神社において、8年に1度、旧暦の7月28日に五穀豊穡を祈って奉納されるもので、宝暦年間(1751～64)には、すでに舞われていたと考えられています。この舞は幼児の露払いに始まり、瓶舞・弓舞・剣舞・田之神舞・將軍舞と続き、鬼神舞で終わる七つの舞からなっています。特に最後の鬼神舞は、同社に伝わる鬼神面をつけた勇壮なものであり、舞のクライマックスで鬼神の面が「笑う」と言われています。



与謝野鉄幹・晶子 八田知紀の歌碑

戸柱公園からは光礁を望むことができ、市内屈指のパワースポットとなっており、3つの歌碑があります。光礁の波と岩とに今日ふれて 清く明るくなる心かな (与謝野鉄幹) 乙女子のさし櫛ほどに やさしきは 西の阿久根の 大島にして (与謝野晶子) 光礁の光る心を 人とはば神のみたまと 吾はこたへん (八田知紀)



阿久根砲

昭和32年、浜区の海岸で発見されました。16世紀頃のボルトガル製のものだと推定され、来港した船の備砲であったと考えられています。当時の海外とのつながりを知る貴重な資料として、展示されています。(昭和34年鹿児島県有形文化財指定)

阿久根の歴史 略年表

昭和27年	阿久根町が市制施行、松田進が初代市長に就任	昭和28年	アマジンチヨウが県・天然記念物に指定される
昭和29年	三笠村が町制施行、早水重雄が初代町長就任	昭和30年	阿久根・脇本海岸一帯が県立公園に指定される
昭和31年	三笠町が阿久根町と合併	昭和32年	商工会が阿久根商工会議所となる
昭和33年	阿久根砲が県・文化財に指定される	昭和34年	建設省鹿児島国道工事事務所阿久根出張所が開設
昭和36年	〇 戸庄右衛門翁が市立図書館寄贈、名誉市民第1号に	昭和39年	〇 東京オリシビック聖火リレー中継地となる、聖火が市長室で一泊
昭和40年	〇 阿久根市消防署完成	昭和41年	〇 阿久根港の魚市場完成
昭和42年	〇 阿久根電報電話局が完成、電話が自動化される	昭和43年	〇 南方神社の神舞が県・無形文化財に指定される
昭和44年	〇 皇太后御夫妻を阿久根駅で奉迎する	昭和46年	〇 高松川防災ダムが完成
昭和47年	〇 牛深航路が廃止	昭和48年	〇 市木に「あくね文旦」を指定
昭和49年	〇 黒之瀬戸大橋が完成	昭和50年	〇 市長・丹宗忠逝去、名誉市民第2号となる
昭和51年	〇 市長・川畑強逝去、名誉市民第4号となる	昭和53年	〇 特産品統一ブランドマーク「アクネつまいネ自然たえ」発表
昭和58年	〇 鳥越古墳発見される	昭和59年	〇 国立療養所阿久根病院が出水郡医師会へ移管、阿久根市民病院が発足
平成元年	〇 集落再編整備事業で本之牟礼集落が倉津に集団移転	平成2年	〇 水産加工団地、食肉加工団地が完成する
平成3年	〇 総合体育館完成	平成6年	〇 「道の駅阿久根」開駅
平成8年	〇 〇 3月と5月に鹿児島県北部地震発生(マグニチュード6.3、震度5強を記録)	平成10年	〇 阿久根東郷線が開通(横座トンネル)
平成9年	〇 阿久根大島が環境庁の「日本の水浴場55選」に選定される	平成11年	〇 阿久根みどり祭り開始
平成10年	〇 阿久根大島の松が1246本倒れる	平成12年	〇 第三セクター株式会社阿久根食肉流通センター設立
平成11年	〇 阿久根大島の再生を目指し、1300本の松を植樹	平成13年	〇 国民宿舎あくねの運営を民間に委託、「グランドビューあくね」となる
平成12年	〇 阿久根大島の渡船場が旧港から新港へ移る	平成14年	〇 情報収集衛星受信局完成
平成13年	〇 番所丘公園全面オープン	平成15年	〇 阿久根市防災行政無線開局
平成14年	〇 鹿兒島本線川内・八代間がJR九州から経営分離され肥薩おれんじ鉄道が開業	平成16年	〇 阿久根、阿久根農業、長島の3高等学校の統合に伴い県立高等学校が開校
平成15年	〇 平成18年7月鹿児島県北部豪雨災害発生、みどり祭りも中止に	平成17年	〇 「華の50歳組」を阿久根市が商標登録
平成16年	〇 北さつま漁協の高度衛生対応型荷捌施設が完成	平成18年	〇 阿久根大島・脇本の両海水浴場が日本の「快水浴場百選」に選定される
平成17年	〇 つわぶきを市の花に制定	平成19年	〇 南九州西回り自動車道出水阿久根道路着工
平成18年	〇 阿久根駅がリニューアルし、にぎわい交流館阿久根駅が開業	平成20年	〇 阿久根市初の女性消防団が発足
平成19年	〇 カスミサンショウウオが県の天然記念物に指定される	平成25年	〇 〇 牛之浜海岸が県の名勝に指定される
平成20年	〇 阿久根駅がリニューアルし、にぎわい交流館阿久根駅が開業	平成26年	〇 阿久根市消防署完成
平成21年	〇 〇 〇 〇 〇	平成27年	〇 阿久根電報電話局が完成、電話が自動化される
平成22年	〇 〇 〇 〇 〇	平成28年	〇 〇 〇 〇 〇
平成23年	〇 〇 〇 〇 〇	平成29年	〇 〇 〇 〇 〇
平成24年	〇 〇 〇 〇 〇	平成30年	〇 〇 〇 〇 〇

あくねの魅力

あくねの特産

あくねの暮らし

あくねの歴史

あくねの紹介

あくねの魅力

あくねの特産

あくねの暮らし

あくねの歴史

あくねの紹介

阿久根人物伝

Historic Figures

阿久根が生んだ偉人たち

あくねの魅力

あくねの特産

あくねの暮らし

あくねの歴史

あくねの紹介

あくねの魅力

あくねの特産

あくねの暮らし

あくねの歴史

あくねの紹介



寺島宗則記念館

寺島宗則の生涯や功績を伝える歴史資料を展示しています。旧家の目の前には改名の由来となった「寺島」も望めます。



宗則直筆の手紙



寺島を眺める表座敷



宗則のビデオ鑑賞



電気通信の父
てらしまむねのり
寺島宗則
(1832年～1893年)

脇本の郷士の家に生まれ、若年より蘭学を修め医学をはじめ幅広い分野の学問に精通しており、島津斉興や島津斉彬の侍医のほか、幕府の蛮書調所の教授手伝としても活躍しました。また、藩の英国留学生派遣の引率役も務め、明治政府では外務卿（外務大臣）などを歴任しました。日本初の電気通信施設を完成させた人物としても知られ、「電気通信の父」と呼ばれています。



阿久根の文化向上にも貢献
かなみげんべえ
河南源兵衛
(1826年～1885年)

明朝末期の動乱の中で中国から日本に帰化した藍会衆が初代「河南源兵衛」を名乗り、初めは唐通詞（中国語通訳）として密貿易に関わっていました。当時の日本では貴重な唐物品には偽物が多く、通訳と同時に目利きのできる源兵衛は薩摩藩から重宝され、河南家は藩の御用商人として代々活躍し、七代目の根心の時代には数隻の大型船を持ち、約300人を雇っていました。ちなみに阿久根大島に最初に鹿を放ったのも河南家です。



河南源兵衛の石碑

江戸の初期から7代にわたって、河南家は琉球をとおりて中国との貿易を担ってきました。記念碑に刻まれている和歌は、七代目「源兵衛」が詠んだもので国道3号沿いの中央公園内にあります。



河南源兵衛ゆかりの品々



河南治助作(世界地図・薩摩地図)



五代源兵衛作(航路里程図)



いしざわ ばくしゅう
石澤 柏州
(1805～1892)

勤皇の名僧

石澤柏州は、文化2年(1805)、脇本に生まれた。幼いときから憐れみの心が深く、また殺生を好まず、出家して志布志大慈寺の住職となった。その学徳を慕われ、大先生と呼ばれるようになると、薩摩藩主島津久光は「わが勤皇の心事を奏上して宿望を上げしめよ」と命じた。柏州が密書を天朝に達した後、久光は朝廷から勅命を受け、藩邸修理の名目で千人余りの精兵を率いて、京都御所の守護に就いた。このように柏州は、わが薩摩が維新の大業において、指導的な活躍をする動機を作ったといえる。



しらはま かんい
白浜 貫以
(1849～1923)

郷土の教育と政治に尽くした

白浜貫以は、阿久根郷土の中心的指導者、白浜貫礼の長男として嘉永2年(1849)、波留の小牟田に生まれた。生来、豪放な性格に容貌も偉大で、維新の戦いには幼少の身で参加した。明治元年(1868)の地方自治制度の創設期に郷の首長を務め、その基礎作りにも貢献した。また、明治22年(1889)、市町村制が敷かれて阿久根村が誕生すると初代村長に選ばれ、その後も3度村長を務めた。その間、治安維持のため阿久根分署の設置や道路の開発、漁業「組合」組織の導入など、郷土の治安・産業の振興開発に貢献した。



なかもら せいきょう
中村 静興
(1864～1927)

阿久根温泉の父

中村静興は早くに両親を失い、おばに育てられた。当時よく高松川に水泳に行っていた静興は、川底が温かかったことから湯が出るのではないかと常に考えていた。独学の後、帝国医科大学予科から長崎医専に転校し卒業後開業。人々の信頼は厚く患者の絶える間がなかったという。そして明治44年(1911)10月、少年時代より夢みていた温泉掘削に着手した。工事は長引き、蓄えた資金もすべて使い果たしてしまった静興だったが、それでも屈することなく掘り続け、翌45年4月、ついに待望の温泉を発見した。



にしむら しゅれい
西村 種礼
(1869～1932)

漁業開発に尽くした

西村種礼は、明治2年(1869)、波留の郷土白浜貫礼の三男、貫以の弟として生まれた。慶應義塾(現・慶應義塾大学)を卒業して阿久根に帰り、明治34年(1901)にわずか32歳で村長に選ばれた。さらに大正6年(1917)には衆議院議員に当選し、政友会に属して国政の発展に尽くした。漁業の開発には特に尽力し、大正元年(1912)、漁業組合長に就任して現在の組合発展の基礎を作った。また、漁業物共同販売所を設置して仲買人の入札制とした。これが漁獲物における近代販売法のはじまりである。



くすだ まさよし
楠田 正義
(1873～1961)

阿久根港開発の父

楠田正義は、明治6年(1873)、波留村の郷土堀切源吾の二男として生まれた。鹿児島尋常師範学校を卒業後、阿久根小学校をはじめとして多くの小学校校長を歴任した。大正14年(1925)、第2代阿久根町長に就任以来、4期16年にわたって町政に尽くした。その中でも、何度となく県と政府に陳情を行い、昭和12年(1937)ようやく決定された阿久根港改築事業は、正義の最大の功績といえる。また、「薩摩大川駅」の開発も、正義の熱意と努力によってできたものといわれている。



たなか つねのり
田中 常憲
(1873～1960)

教育者・歌人

田中常憲は、明治6年(1873)、高松橋にほど近い波留の田中六郎右衛門常典の二男として生まれた。小学校教員養成所を卒業後、わずか23歳で鷹巣小学校の校長に抜擢された。明治34年(1901)には中学校の教員免許を取得し、長野や大阪、大分、京都などの中学校に勤務した。長野県上田中学校在職時には、今でも長野県下青年の間で愛唱されている『信州男児』を、桃山中学校校長時代には桃陵健児の歌を作って、若人たちに親しまれた。また、常憲は歌人としても有名で、歌誌「新月」を主宰し、多くの歌集も出している。



たなか うきつ
田中 右橋
(1875～1963)

法曹界の偉人

田中右橋は、明治8年(1875)、波留の末田景春の二男として生まれた。東京帝国大学法学部を卒業後、京都地方裁判所司法官候補に奉職、奈良地方裁判所長、大審院(最高裁判所)判事、仙台・広島などの各控訴院長を務めた。ジュネーブにおける万国手形法に関する国際会議には、わが国の全権として出席した。司法界における長年の功績により、昭和10年(1935)には正三位勲二等に叙せられた。また、阿久根大島に鹿を放つことを思い立ち、奈良春日大社の神鹿2つがいをもらいうけてやったこともある。



なかお すみとし
中尾 純利
(1903～1960)

初の世界一周機長

中尾純利は明治36年(1903)、山下の中尾助太郎の三男として生まれた。小学校の頃の愛読誌は当時の少年雑誌「飛行少年」であったという。昭和14年(1939)、純利は純国産機の「ニッポン号」の機長として、世界一周親善の飛行に飛び立った。カナダ・アメリカ・南アメリカ・アフリカ・ヨーロッパ・アジアと五大州を巡った距離は52,860キロ。出発以来56日間、滞空時間194時間にも及ぶ快挙であった。その後昭和27年(1952)、羽田空港が、東京国際空港となると、初代空港長となった。



はし しゅうえもん
榎 庄右衛門
(1889～1972)

初の名誉市民

榎庄右衛門は、明治22年(1889)、西目高之口の榎次郎の五男として生まれた。幼くして両親を失ったが不屈の精神と機知に富み、その商才を発揮した。小学校高等科を卒業後、兄の経営する塩焚きに日夜働いた。さらに魚・海藻や甘藷問屋を始めたが、ともに大成功を取った。その後、澱粉製造業に転じ、澱粉糖化(水飴)に成功、多くの工場と会社を設立発展させた。また、町議会・市議会議員として地方自治に尽くし、市立図書館を建築寄贈したほか、教育文化・体育の向上に多額の私財を寄贈してその発展に寄与した。



とりかい もとほる
鳥飼 源晴
(1926～1967)

辺地医療に尽くした

鳥飼源晴は、大正15年(1926)、折口永田下の鳥飼源吉の四男として生まれた。熊本第五高等学校卒業後、2年間教鞭をとったが、再び熊本医科大学に学び、昭和33年(1958)、脇本に外科医として開業した。明るい性格と献身的な仕事ぶりでも地区民の信望も厚く、非常に愛された。離島診療にも積極的に取り組んでいたが、昭和42年(1967)、退院する少女を自ら操縦するボートで獅子島に送り届けた帰路、天候が急変し、冬の海の荒波の中で看護婦の姉とともに短い生涯を終えた。